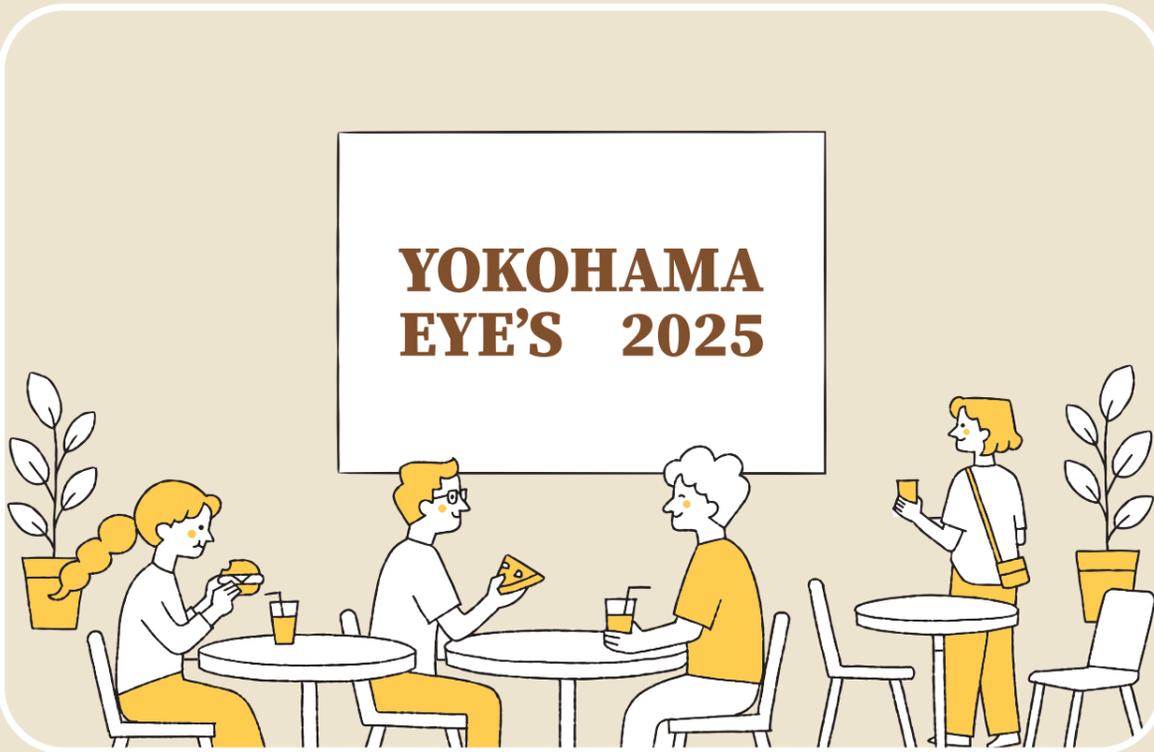


ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ

YOKOHAMA EYE'S 2025

ヨコハマ アイズ 2025



テーマ 学校と地域が連携した居場所づくり

特集① 校内居場所カフェ「ようこそカフェ」の10年

- ・〔特別寄稿〕「校内居場所カフェがそこにあること」
- ・〔報告〕横浜市立高校3校による校内居場所カフェ活動報告会
- ・ようこそカフェを支えるメンバーが振り返る10年

特集② 神奈川県内における「校内居場所づくり」

1. 神奈川県立大和東高校「BORDER CAFE」
2. 神奈川県立相模向陽館高校「ひまわりカフェ」
3. 横浜市立寛政中学校「学びの居場所」
4. 横浜市立戸塚高校定時制「定期食事会」「とまりぎ」
5. 横浜市立みなと総合高校「みなとCAFE」

データで見る
青少年 高校生の「居場所」「校内居場所カフェ」に関する調査報告



はじめに

「YOKOHAMA EYE'S 2025」をお届けいたします。

これまで学校は学びの場としてだけでなく、日々の見守りや相談対応、部活動をはじめとした放課後の活動を通じて、生徒の生活や成長を支える中心的な役割を担ってきました。教職員が生徒一人ひとりの変化に気づき、声をかけ、安心して過ごせる環境を整えることで、多くの子ども・若者の育ちを支えてきたことは言うまでもありません。

しかし近年、子どもや若者を取り巻く課題は年々複雑化し、家庭環境や学習状況、進路や人間関係などさまざまな要因が重なり合うなかで、学校だけで対応することが難しい時代になっています。こうした状況のもと、地域と学校が連携し、子ども・若者を支える「居場所づくり」の取り組みが、全国各地で広がりを見せています。

その一つとして注目されているのが、「校内居場所カフェ」です。

よこはまユースでは、定時制高校に通う生徒の社会的自立を支える取り組みとして「ようこそカフェ」を実施してきました。今年度で10年目を迎えるこの活動は、教職員、地域の大人、ボランティアなど多くの実践者や関係者の思いに支えられながら、生徒が安心して過ごせる居場所として歩みを重ねてきました。何気ない会話や小さな関わりの積み重ねが、生徒自身の気づきや次の一歩につながっていく場でもあります。

本号では、「学校と地域が連携した居場所づくり」をテーマに、校内カフェという現場に携わる実践者の声に焦点を当て、日々の工夫や直面している課題、そしてその活動に込められた思いを紹介します。あわせて、神奈川県内で進められているさまざまな取り組みや、その広がりについても取り上げながら、「学校と地域がともに青少年を支える」これからのあり方を考えていきます。

これからもよこはまユースは、青少年ならびに市内青少年団体のサポート役としてその役割を担ってまいります。皆様におかれましては引き続き、横浜市の青少年活動にご理解・ご協力をお願い申し上げます。

2026年3月末日
公益財団法人よこはまユース
代表理事 大向 哲夫

テーマ 学校と地域が連携した居場所づくり

I 校内居場所カフェ「ようこそカフェ」の10年

- (1) ようこそカフェ紹介 04
- (2) 〔特別寄稿〕「校内居場所カフェがそこにあること」 07
- (3) 〔報告〕横浜市立高校3校による校内居場所カフェ活動報告会 09
- (4) ようこそカフェを支えるメンバーが振り返る10年 13

II 神奈川県内における「校内居場所づくり」

- (1) 神奈川県立大和東高校 「BORDER CAFE」 20
- (2) 神奈川県立相模向陽館高校 「ひまわりカフェ」 21
- (3) 横浜市立寛政中学校 「学びの居場所」 22
- (4) 横浜市立戸塚高校定時制 「定期食事会」「とまりぎ」 24
- (5) 横浜市立みなと総合高校 「みなとCAFE」 26

III データで見る青少年

- 高校生の「居場所」「校内居場所カフェ」に関する調査報告 28

(1) ようこそカフェ紹介

1. 校内居場所カフェとは

校内居場所カフェは近年、各地の高校、主に定時制や通信制、全日制のクリエイティブスクールなどで広がっています。学校の校舎内で、週1回程度、若者支援NPOなど外部団体が、学校・教職員と連携して、生徒がだれでも無料で利用できる居場所カフェを運営し、生徒にとって身近な相談・交流の場を提供することで、生徒のさまざまな課題を発見・支援するための場づくりと定義されています。

『学校に居場所カフェをつくろう！—生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』（明石書店、2019年）



2. 横浜市立横浜総合高校「ようこそカフェ」の取組み

横浜総合高校は、神奈川県内唯一の三部制・単位制・総合学科という特色をもち、約1,000人の生徒がそれぞれスケジュールを管理し、3年または4年かけて単位を取得し、卒業をめざします。

「ようこそカフェ」は2016年から始まり、高校生たちがお金をかけずに小腹を満たせる「無料のカフェ」を入口にすることで、市内のユースセンターや相談窓口、支援機関で待っていても出会う機会の少ない若者と校内で顔見知りになり、一緒に過ごすなかで信頼関係を築き、高校生にとって身近な「居場所」となることを目指しています。



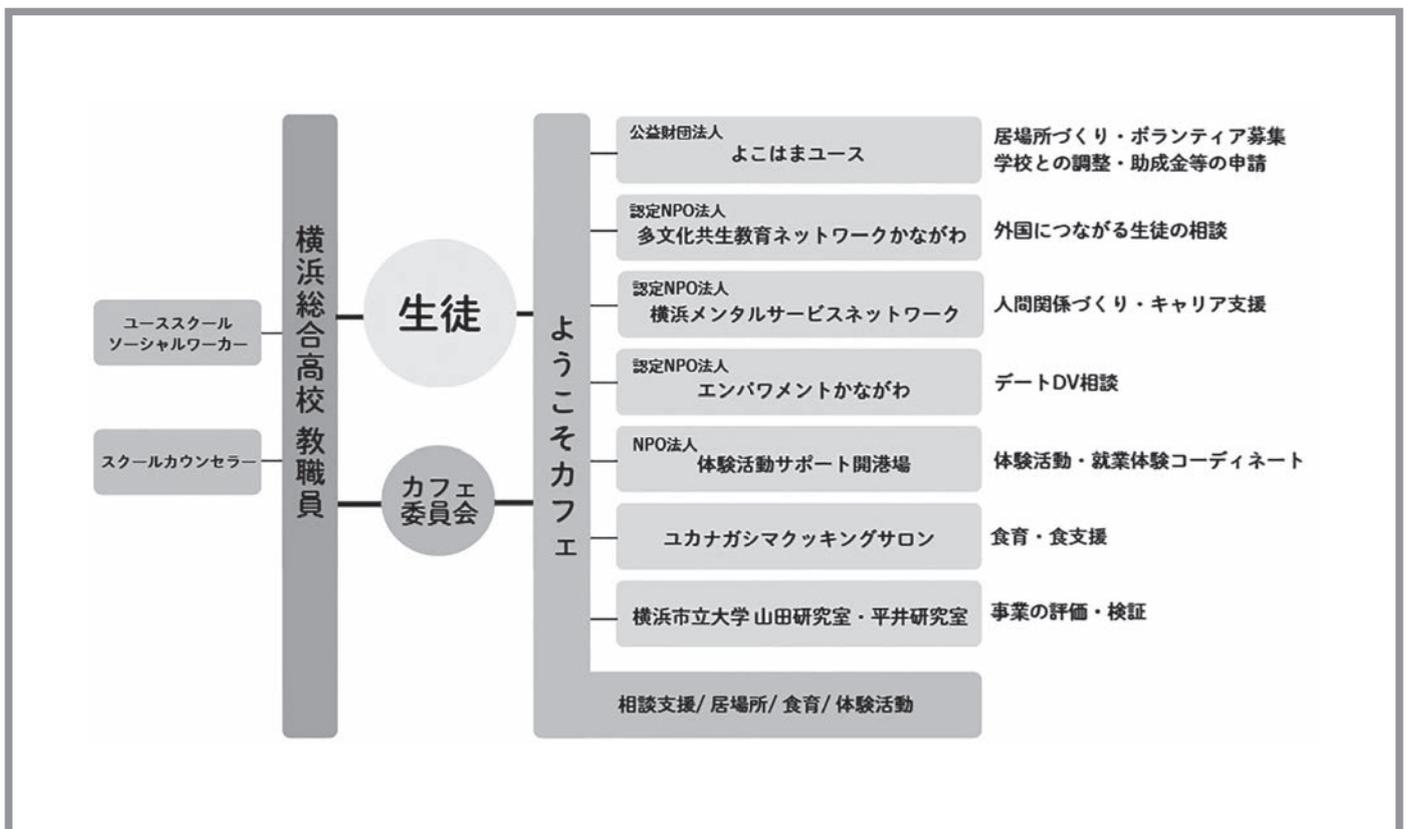
■ ようこそカフェの特徴

① オープンなフリースペースでの実施

カフェは月2回程度、水曜日の正午と夕方からの二部制でオープンしています。校舎に入って教室に向かうまでの廊下に向いたフリースペースで開いており、授業の行き帰りに気軽に立ち寄れる場所です。

② 複数団体による運営

若者支援団体やボランティアが学校と連携し、チーム一丸となり運営しています。さまざまな立場の大人が学校の中に入ることで、外からは見えにくい高校生たちの現状や課題をそれぞれの視点から発見することができます。



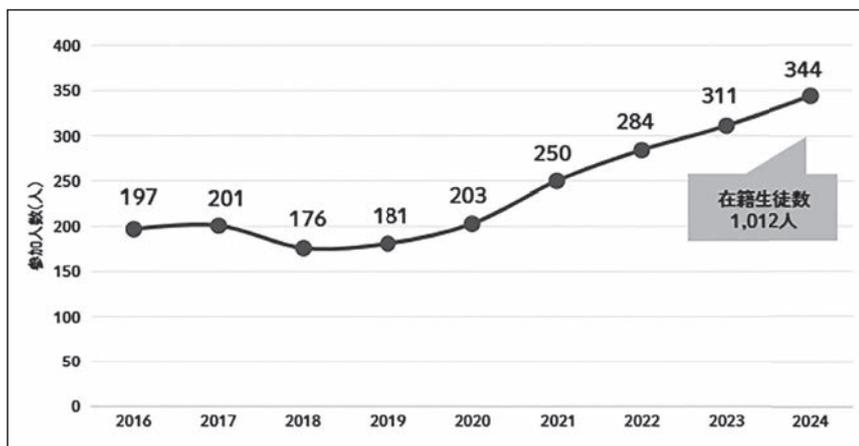
③ カフェをベースにした体験活動の推進

- ・ **就業体験** 県内外の農家協力のもと、日帰りや1泊2日で就業体験を実施しています。
種まきや収穫体験、農産物を使った商品開発を通して、第一次産業について理解を深めるとともに、仲間と協力することの大切さを学ぶ機会をつくっています。
- ・ **地域交流** 近隣の商店街で年に1度、「横総大感謝祭」を開催しています。
就業体験先への恩返しとして生徒が各地の特産品を販売し、その売り上げをもとに避難所内で使用する掲示セットを作成し、市内外の地域防災拠点へ寄贈しました。
- ・ **異年齢交流** 区内の小学校の放課後キッズクラブやこども食堂で遊びの支援員として継続的にボランティア活動を行い、こどもたちや地域の方々との交流を深めています。

3.ようこそカフェの歴史

横浜市立大学の高橋寛人教授(当時)が、高校内居場所カフェを軸とした自立支援を横浜市内の高校で広めたいと考え、横浜総合高校の天野校長(当時)に提案されました。カフェ運営を担う団体として「公益財団法人よこはまユース」を推薦し、「認定NPO法人多文化共生教育かながわ(Me-net)」、「認定NPO法人横浜メンタルサービスネットワーク」と協力して運営する形を目指すことになりました。

年 月	おもなトピック
2016年10月	カフェオープン、生徒からの公募で「ようこそカフェ」と命名。
2017年 5月	ユカナガシマクッキングサロン参画
2019年 3月	地域貢献事業「横総大感謝祭」開催
2020年 4月	教職員によるカフェ委員会発足、コロナ禍での運営を模索 校内の畑づくり「ようこそ農園」スタート
2020年 9月	認定NPO法人エンパワメントかながわ参画
2022年 4月	NPO法人体験活動サポート開港場参画
2023年 4月	異年齢交流事業開始
2025年 4月	III部生徒を対象にしたカフェ開催(年4回)
2025年 8月	ようこそカフェ10年目記念活動報告会・シンポジウムを開催



【カフェ参加生徒数の推移】



生徒からのメッセージ

(2) (特別寄稿) 校内居場所カフェがそこにあること

横浜市立大学 国際教養学部 教授
山田剛史 (ようこそカフェ運営委員)

私が「ようこそカフェ」に関わるようになったのは、横浜市立大学名誉教授(現、石巻専修大学教授)の高橋寛人先生にお声がけを頂いたことがきっかけでした。高橋寛人先生は教育制度論がご専門の、その領域では名前を知らない人がいない程の著名な研究者です。そんな高橋先生との出会いは、2020年4月、私が横浜市立大学国際教養学部に着任した時でした。

横浜市立大学の教職課程の専任教員として、高橋寛人先生とは2年間ご一緒させてもらいました。高橋先生が定年退職される時に、「山田さんにやってもらいたいことがある」と言われて、ようこそカフェの外部委員をバトンタッチされました。当時はあまり深く考えずに高橋先生からのお願いを引き受けてしまったのですが(その後、高橋寛人先生がどんな思いを持って、創設時からようこそカフェに関わってこられたのかを知ることになり、自分が受け取ったバトンの重みを知ることになります)。このような経緯で、2022年4月から、ようこそカフェの運営会議に参加させてもらっています。となるともう4年近く経つのですね。そんなに時間が経っていたのかと驚きました。

ようこそカフェは、私個人のみならず、横浜市立大学の学生達にとっても、大変貴重な学びの場になっています。前述のように、私は横浜市大で教職課程の専任教員として仕事をしています。教員志望の学生にとって、大学在学中のボランティア活動の経験はとても重要です。ようこそカフェはそうした貴重な機会を横浜市大の学生達に提供してくれているのです。よこはまユースの山中さんとは定期的にやり取りをさせてもらっています。そのたびに、横浜市大の学生のことを山中さんはとても褒めてくれます。「横浜総合高校の生徒さん達との会話が自然で素晴らしい」「優しいお兄さん(お姉さん)として生徒から慕われている」、そんな嬉しい言葉をたくさん頂くのです。その言葉を私は学生に伝えます。彼らがちょっと照れながら、でも嬉しそうな顔を見

せてくれます。

私自身は、まだまだそんなに深くようこそカフェの活動に関わることができていません。何度か実際のカフェの様子を見学させて頂いた事はありますが、私なんかより、もっと長く、深く活動を継続していらっしゃる、例えば、長島由佳さんのような濃い関わりができていないのが、申し訳ないような、長島さんが羨ましいような、そんな気持ちを持っています。長島さんは、ようこそカフェの運営会議(この会議は学期に1度程度、横浜総合高等学校の校長室にて行われています)で、隣の席になることが多いのですが、いつも明るくパワフルで一緒にいるだけで元気をもらえるような素敵な方です。実はまだ長島さんが作ったおにぎりを食べたことがないので、近い将来、是非食べてみたいです。

さて、この原稿で私は「校内居場所カフェ活動報告会のふりかえり、学校・地域にそれぞれ求められること、今後の課題」等について書くことが期待されていますので、昨夏に開催された校内居場所カフェ活動報告会について書きたいと思います。活動報告会は、2025年8月20日、関内にある横浜市青少年育成センターにて開催されました。60名定員のところ、定員を超える参加者が集まり、会場は熱気に包まれていました。

第1部は「活動のあゆみ・これまでの成果の報告」。ようこそカフェ設立から10年を振り返り、これまでの様々な取り組みが紹介されました。第2部は「カフェ実施校教員と運営団体によるパネルディスカッション」。前述の山中さん、長島さんと3名の高校の先生(横浜総合高等学校の柏木祐人先生、みなと総合高等学校の堀谷沙貴先生、戸塚高等学校の伊藤 渉先生)、合計5名のパネラーが登壇されました。私はこのパネルディスカッションにコーディネーターとして参加させてもらいました。3人の先生から、各学校のカフェの取り組みを紹介頂きました。

「校内居場所カフェ」といっても、それぞれ学校ごとの特

色があり、抱える課題もそれぞれ異なります。共通しているのは、食事を提供する場になっていること(これは一部の生徒にとっては大変重要な機会となっています)、家族や学校の先生とは違う大人と接する機会になっていること(横浜市大のボランティア学生達も、生徒にとっては年の近い大人ですね) だと思いました。パネルディスカッションを通じて、「やはり校内居場所カフェは必要であり、確かな存在意義がある」ことを確認できました。パネラーの皆さんの熱い思いがあふれてたくさん話してくれるので、コーディネーターとしてセッションの時間管理がとても難しかったです(反対にパネラーから話を引き出さないと、と困ることはなかったです笑)。

ここからは、校内居場所カフェが抱える課題とその課題にどのように対処できるのかを、私なりに述べてみたいと思います(個人的な見解ですので、正解というわけではありません)。細かく見ていくと色々な課題があります。しかし、大きな視点で見ると、①カフェ運営の人材のこと、②カフェを運営していくための資金、という2つの課題が見えてきます。

1つ目は、カフェの運営が、今回のパネラーの先生達のように、少数の熱意のある先生のマンパワーに依存していることがあります。実際にパネルディスカッションの中でも「後継者の育成の難しさ」について語られました。高校の先生はずっと1つの学校に留まり続けるわけではありません。時期が来たらやがて別の学校へと異動されます。その時に、後を継ぐ人材がいなければ、せっかく築いてきたものが台無しになってしまうこともありうるのです(これは、部活で顧問の先生がいなくなったら、強豪校が弱小校になってしまう

た、という例を思い浮かべれば分かりやすいかもしれません)。2つ目は、現実的ですが財政的な問題です。ようこそカフェについても、近い将来横浜市からの支援金額がかなり減額される予定です。これはダイレクトに校内居場所カフェの運営に影響します。

恒常的にカフェを安定して運営していくためには、「特定の人々のやる気に頼らないシステム作り」と「自治体や企業などの長期的なサポート(金銭的、物理的)」が必要なのです。これら課題への対処に取り組む必要がありますが、簡単なことではありません。しかし、諦めずに、カフェに関わるみんなが互いに知恵を出し合って、より良い方向へと進んでいく必要があるのです。それに加えて、近未来の可能性として、OB・OGに関わってもらえることがあるでしょう。ようこそカフェについては、10年の歴史があります。ということは、カフェを体験したかつての卒業生もかなりの数になるはず。こうしたネットワークを有効活用することも必要です。

校内居場所カフェがそこにあることで救われる生徒がいる。何気ない大学生との会話で、ポロリと本音を話せることがある。校内居場所カフェは、ずっと存在し続ける意義があり、そして責任があるのです。私自身も大学教員として、自分でできることを考えながら、これからも校内居場所カフェに関わっていくことができればと考えています。次の「校内居場所カフェ活動報告会」は5年後でしょうか?10年後でしょうか?その時も、今よりもっとパワーアップした「ようこそカフェ」に今と変わらずに携わっていれたら幸せだなと思っています。



(3) (報告) 横浜市立高校 3 校による校内居場所カフェ活動報告会

ようこそカフェ10年目を記念し開催した「校内居場所カフェ活動報告会」では、「学校と地域が連携してつくる居場所―校内カフェの実践から―」と題し、横浜市立高校でカフェを実施している3校の教員と運営委員会メンバーがそれぞれの関わりから見えたことや今後への思いを共有しました。

本号では当日実施したパネルディスカッションの内容をご報告します。

※記載内容は2025年8月時点のものです。

【登壇者】

柏木 祐人(横浜総合高校教諭/現・横浜総合高校カフェ運営委員長)
 伊藤 渉 (戸塚高校定時制教諭/校内カフェ立ち上げ担当)
 堀谷 沙貴(みなと総合高校教諭/元・横浜総合高校カフェ運営委員長)
 長島 由佳(ユカナガシマクッキングサロン主宰/ようこそカフェ運営委員会)
 山中 梓 (よこはまユース/ようこそカフェ運営委員会)

【進 行】

山田 剛史(横浜市立大学 国際教養学部教授・ようこそカフェアドバイザー)

【カフェ実施校概要】

※2025年現在

学校名	横浜総合高校	戸塚高校定時制	みなと総合高校
課程	定時制・Ⅲ部制・総合学科	夜間定時制	全日制・総合学科
全校生徒数	1,041人	80人	699人
カフェ参加生徒数(平均/回)	350人	40人	200人
カフェ開始年度	2016年度	2023年度	2023年度
カフェ開催頻度	年24回	年17回	年12回



2025年8月20日(水) 校内居場所カフェ活動報告会 (左から山田教授、柏木先生、伊藤先生、堀谷先生、長島氏、山中)

◇各学校の状況・活動について

【柏木】横浜総合高校では、通級指導教室や特別募集の開始以降、教員はどうしても支援が必要な生徒への対応に追われがちになっています。一方で、困難や孤立感を抱えながらも「大丈夫そう」に見える生徒や、悩みを言語化するほどではないけれど誰かに話を聞いてほしい生徒に、十分に関われていない現状があります。そんな中ようこそカフェでは、教室では見せない明るい表情で過ごす生徒の姿があり、大学生や社会人など多様な大人との関わりが、生徒の安心感や自己肯定感につながっていることを実感しています。

「カフェがあったから学校に通い、卒業できた」という生徒からの感謝のメッセージからも、ようこそカフェが心の支えになっていることを実感しました。Ⅲ部制で放課後のない学校において、カフェは生徒にとっての「放課後」や「余白の時間」として機能し、変わらない居場所としてあるからこそ、小さな挑戦へ踏み出せる場になっていると感じています。

【伊藤】戸塚高校定時制には不登校経験や家庭環境、発達特性など複合的な課題を抱える生徒が多く在籍していますが、自分を変えたいという思いを持ち、真面目に学校生活に向き合う生徒も多くいます。カフェを始めた背景として「1日1食しか食べていない」「食事の選び方が分からない」といった生徒の実態があり、「まずは食べることを保障したい」という思いがありました。校内カフェ「とまりぎ」と地域ケアプラザでの定期食事会を通じて、生徒は食事を提供されるだけでなく、調理や片付けなどの生活体験や地域の大人と関わる社会体験を重ねています。フードバンクや子ども食堂、地域団体との連携により活動は段階的に広がり、現在は卒業後を見据えた企業との接点づくりにも取り組むなど、カフェは生徒と社会をつなぐ重要な場となっています。

【堀谷】みなと総合高校では、進学や学校生活を前向きに捉える生徒が多い特性を踏まえ、キャリア支援や社会との接点づくりをテーマに月1回カフェを開催してきました。現在は生徒が主体となって企画・運営するカフェづくりに向けて大学生コーディネーターが伴走し、生徒有志とともにワークショップや交流

企画を実施することで、活動に参加すること自体が居場所となることを目指しています。

2023年度はイベント型としてスタートし、2024・2025年度は東急子ども応援プログラムの助成金を活用して運営していますが、助成終了後を見据え、「細く長く続ける」ことを目標に、カフェ文化を学校の中に根づかせ、地域や多様な大人と関わり続けられる仕組みづくりに取り組んでいます。

【長島】私は食・キャリア・人権の3つを柱に、教員、学校、運営団体それぞれの立場を俯瞰しながら校内カフェに関わっています。2016年にようこそカフェの存在を知り、「自分にできることがある」と直感し、2017年から軽食の提供を始めました。活動を続ける中で、生徒たちの空腹や家庭的・文化的背景に気づき、「心と体にしみる食」を届けることの重要性を実感するようになりました。カフェでは一人ひとりと目を合わせて食事を手渡すことを大切に、「あなたのそばには必ず誰かがいる」というメッセージを伝え続けています。また、食育事業に加えて校内の畑づくりや農業体験を通して、生徒が役割を持ち、自己有用感を育み、次の一步へ進む過程を見守ってきました。大人が悩み、考え、工夫しながらも楽しんで行動する姿そのものが、こどもたちの指針になると考えています。

◇校内に居場所がある意味

【山田】先生方の視点からみた、校内にカフェがある意味とはなんでしょうか？

【柏木】校内には、ゆっくり過ごせる場所がほとんどなく、行事はあってもクラス単位で関わる機会は多くありません。そんな中で校内カフェを続けていると、カフェをきっかけに友達ができる場面をよく目にします。学年やクラス、Ⅰ部とⅢ部といった枠を越えて、生徒が自然に混ざり合い一緒に過ごしています。名前も知らないままでも、「また会ったね」と声をかけ合う関係が生まれていて、そうした光景を見るたびに、カフェという場が生徒の中で少しずつ広がっているのを実感しています。

【伊藤】生徒が知らない場所や知らない人に抵抗を感じていて、なかなか校外に出られない現実があります。

しかし、卒業後に向けて社会との接点を少しずつ作っていく必要があるため、まず知っている場所と知らない人と出会う経験を積める場が大切だと思っています。また、授業中だけでは生徒の抱えている課題はなかなか見えず、たわいない会話の中で分かることが多いです。校内で地域の方や教員が混ざり一緒に関わっていくことで、生徒が抱えている課題の根本を理解し、解決につなげていけると感じています。

【堀谷】地域にも高校生をサポートする施設や窓口がありますが、自分に支援が必要だと思っていない生徒も多く、相談窓口に行くのはハードルが高いです。その点、学校の日常の中に話を聞いてくれる人、支援してくれる人が自然にいる環境をつくれるのは、学校の中だからこそできることだと思います。全日制・定時制など学校の種別に関係なく、思春期の高校生たちは悩みや不安、プレッシャーを抱えています。だからこそ、誰もが気軽にアクセスできる居場所が校内にあることが大切だと感じています。

◇ 学校と地域が連携することの"難しさ"

【山田】学校・地域との連携で難しいと感じる点、うまくいったエピソードはありますか？

【柏木】学校の中には先生という大人しかおらず、教員の忙しさもあって生徒一人ひとりに十分に関わるのが難しいと感じています。外部の大人が関わることで、生徒は先生には言いにくい思いを安心して話すことができ、学校とは違う視点で支えられる場が生まれます。こうした「先生以外の大人」に話せる場があることが、外部連携の大きな意義だと感じています。

【伊藤】地域連携で難しいことは、校内での組織づくりや継続体制の構築です。誰が担い、どう組織化し、異動時に引き継ぐかが課題だと感じています。連携できたエピソードとしては、生徒が地域の方と自然に関わり、食事会をきっかけに地域の施設でアルバイトを始めたことや、地域のこども食堂で軽音楽部が演奏会をするなど「支援される側から支援する側」へ広がった事例から、地域とつながることの発展性を実感しています。

【堀谷】学校の先生とは違う立場の大人が関わってくれることに、助けられたと感じています。教員が注意しても響かないことが、カフェのおばちゃんに言われると素直に聞いていたり、カフェならではの温かく自然なやりとりが、生徒の行動をやさしく変える場面もあります。また、生徒対応に悩む教職員にとってもカフェが相談先となり、専門的な支援機関につながる役割を担っていただいている点が大きな支えになっています。

【長島】堀谷先生の言うとおり、生徒もスタッフも多様で、「この人の言うことなら聞ける」と生徒自身に分かっている関係性があります。地域のおばちゃんだからこそできる、おせっかいな声かけが生徒の行動を変える場面も多く見られます。一方で、地域とつながるには協力者同士が顔の見える関係性であることに加え、それを柔軟に受け入れてくれる学校の管理職・教職員の存在も重要になってきます。

【山中】学校は地域の中にあっても、生徒の様子は外から見えにくいと感じています。その中で、カフェという形で学校を開いてくださる先生方との出会いは大きく、外部の要望を受け止め、調整や実務を担ってくださる存在があることで、継続できる学校が広がっていると実感しています。

◇ 学校で"外部"を受け入れるには

【山田】3校では現在、外部と連携した居場所づくりをしていますが、当時は反対する先生もいらっしやっただのではないのでしょうか。校内で居場所づくりをしたいと考えている先生たちに向けて、外部から関わりたいというアプローチがあったときにどのようにしたらよいのでしょうか？

【柏木】どの学校にも、外部の力が必要だと感じている教員は必ずいると思っています。カフェの立ち上げ当初は反対意見も多かったものの、時間の経過とともに当時を知らない教員が増え、「すでにあるもの」として受け止められるようになりました。一方で、外部団体の活動が教員一人ひとりのものとして共有されにくいという課題も感じています。今後は、学校全体で関わる体制づくりが必要だと考えています。

【伊藤】外部との連携は、信頼できる人からの紹介があるこ

とでハードルが下がると感じています。戸塚高校定時制では、生徒の課題感を教職員間で共有していたため、外部の人が入ることへの抵抗は少なく、管理職の理解と後押しもありスムーズに立ち上げることができました。

【堀谷】立ち上げから数年間は、外部の人が学校に入ることへの不安や反対が強く、職員会議でも安全面や衛生面への指摘が続きました。そこで、スタッフの顔が見える工夫や、生徒の声を伝えるアンケート、衛生管理の徹底などを重ね、安心感を積み上げてきました。さらにコロナ禍をとともに乗り越える中で、外部と教職員が同じ思いで生徒を支えていることが共有され、信頼関係が深まったと感じています。

【長島】外部として学校に関わる中で、継続的に足を運び、日常的に顔を合わせることで信頼につながると実感しています。最初は距離を感じる場面もありましたが、挨拶を交わし、準備や作業をとともにする中で、少しずつ受け入れられていく感覚がありました。

◇ 今後も継続していくために

【山田】それぞれ、立ち上げ時や継続の際に苦労があることが分かりました。今後もカフェを細く長く継続させていくためにはどうしたらよいでしょうか？

【柏木】カフェを引き継いだ当初は前任の堀谷先生が異動し、手探りの状態でした。先生方やよこはまユースの協力もあり、現在も安定して続けられていると感じています。一方で、特定の人に依存した取り組みを学校組織として引き継いでいく仕組みにしていくことの難しさと必要性を強く感じています。

【伊藤】立ち上げは思いのある教員がいれば可能ですが、継続するためには個人の取り組みを組織の仕事として引き継いでいくことが不可欠だと感じています。同時に、現場に情熱を持つ人の存在が何より大事です。地域の中に、子ども食堂がじゅまるの中村さんのように活動を楽しみながら支えてくれる人がいることで孤独感が和らぎ、続ける力になります。加えて、よこはまユースのような事務や財源面を担う組織、行政や教育委員会からの後押しがあることで、「学校個人」ではなく「自治体としての取組」となり、長く続けていけると感じています。

【堀谷】現実的に必要なのは、安定した予算だと感じています。大きな金額でなくても、少額でも複数年にわたり続けられる見通しがあることが大切です。たとえ規模が小さくなくても、月1回でも、「家でも学校でもない第三の居場所」を細く長く続けることに意味があり、こうした場があることを発信し続けることも大事です。これから校内の居場所を始めたい先生や地域の方には、まずは月1回程度、空き教室など無理のないかたちで始めて、継続させていってほしいと思います。

【長島】活動を続けるためには、人・カネ・モノ・場所の条件をそろえ、特に予算をきちんと位置づけることが重要だと考えています。学校という場所があり、思いのある教職員や地域の人がいるなら、行政が市立高校の居場所づくりを支援し、予算化していくべきだと思います。そのために、必要性を伝え続けることも私の役目です。同時に、思いを共有するボランティアが集まり、大人同士が顔の見える関係を築くことで、活動が広がり、社会も動いていくと信じています。

【山中】生徒自身が「カフェが必要だ」と感じてくれている限り、続けていきたいと考えています。10年目を迎え、年間25回、毎回300～400人が集まる場を支えているのは、多くのボランティアや運営メンバーの力によるものですが、善意やボランタリーな思いだけでは限界があります。行政や企業など、未来ある高校生を応援する仕組みがあつてこそ継続が可能になります。1年でも2年でも長く続けていけるよう、支援の輪が広がることを願っています。



活動報告会当日は、各校のカフェの様子や生徒のメッセージを展示しました。

(4) ようこそカフェを支えるメンバーが振り返る10年 — 運営委員の声 —

生徒数1,000人を超える横浜総合高校では、ひとり一人の状況や背景が多様であるがゆえに、課題や不安が見えにくくなることもあります。中退や進路未定というかたちで社会に出る生徒をひとりでも減らしたい、その思いから、教職員による相談支援に加え、カフェという居場所が生まれました。雑談の中でこぼれる本音や、ふとした相談から見えてくる小さなサイン。横浜総合高校においてこの交流相談の場は、早い段階で生徒のリスクに気づく大切な入口となってきました。本ページでは、10年にわたる取り組みの中で見えてきたこと、積み重ねてきた思いを、運営団体のメンバーの言葉で振り返ります。

横浜総合高等学校 校長／横田 孝行

横浜総合高校に着任した4年前は、まだ感染症対策が色濃く残っていました。ようこそカフェが、その黎明期から多くの方々に支えられ、少しずつその幅を広げ、さまざまなアウトリーチも活発に行われていた頃に突き付けられた蔓延防止。集まってはいけない、しゃべってはいけない、飲んだり食べたりしてはいけない、それが当たり前の中、あらゆるものが止まってしまっても、生徒たちの抱える悩みや課題が止まるわけではないと「できるやり方」を模索し、つないでいただいた勇気に感謝しかありません。

先日、カフェ関係の方から、「校長先生と初めて話をしたときの、結びのありがとうが印象に残っている」との話を頂きました。いま、自分にできることは、お互いの安心安全を意識しながら、ありがとうのバトンも一緒につないでいくことなのかもしれません。これまでを支えてくださった方々、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしく願いいたします。

認定NPO法人横浜メンタルサービスネットワーク／鈴木 弘美

ようこそカフェに参加するようになって早10年。幸いにも横浜メンタルサービスネットワークは、カフェの一員として今も継続して参加させてもらっています。オープンまでに半年かけ、会議ですり合わせをしながら、自分たちの立ち位置を整理して臨んだ初日を思い出します。

ある報告書に書いた文章を改めて掲載します。

「カフェの大半は彼らとの会話によって成り立ち、会話によって高校生の生活を知ることとなる。「これからバイトです」「部活の休憩時間なんだ」「帰ったら、小さい弟の面倒見なくちゃならない…ここで癒されてから帰ることにする」など、カフェの場に来て、誰かを相手にぼそっと外に吐きだすこと、それがメンタルヘルス活動につながる。実際高校生たちは、あの場でいろいろなことを吐きだただけで、自己治癒していく場合が多い。

① つぶやきを吐き出す ② 吐き出す仕組み ③ 吐き出すことを捨てる ところまで丁寧に関わっていきたいと思う。”

これからも、高校生たちのつぶやきに耳を傾けたいと思います。

認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ (ME-net) ／高橋 清樹

ME-netは、ようこそカフェの立ち上げ時から関わりを持っています。当時の時の校長先生に「校内カフェをやりませんか」と相談したときに、「同じ提案がよこはまユースからもあったよ」と言われて驚いたことを記憶しています。「では、一緒にやりましょう」とスタートしたのが、ようこそカフェでした。高校内でのカフェは大阪から始まり、神奈川では田奈高校が最初でした。田奈高校の校内カフェを立ち上げた石井さんは、カフェでの大人たちとの楽しい会話や関りの時間は、生徒たちにとって「心の貯金箱」と表現しています。言い得て妙、まさに校内カフェの役割はそれだと思います。ずっと心を閉ざしていた生徒たちが、はにかみながらもちょっとずつ心を開いていく。そして、大人の温かさややさしさのコインを貯金箱にためていく。心の貯金箱にたまったコインをいつまでも大切にしてくれるでしょう。

ユカナガシマクッキングサロン／長島 由佳

「ようこそカフェ」は「ようこそチーム」

様々な高校生が、それぞれの想いを胸に通学しています。好きなことで未来を描く生徒。お腹がいつもぺこぺこだったり、バイトで食をつないでいる生徒。友達との関係に笑ったり落ち込んだりしている生徒。髪の色が変わったねと伝えると嬉しそうな笑顔を返す生徒。どれも「ようこそカフェ」に立ち寄る生徒の横顔です。

高校生として生きる彼らがいつでも心豊かな気持ちでいて欲しい。温もりのあるものを手にし、小腹を満たすことで、少しでも健全な未来を描き、自らの力で人生を切り開く大人になってほしい。そんな願いの「ココロとカラダにしみる美味しいCOOKING」は多くの方々の理解を得て継続中です。彼らは3～6年で卒業していきます。しかし私たちは、新しい次世代の生徒達にも贈れるよう、「継続と積み重ね」をやめることなく、進化し続ける「ようこそチーム」でありたいと切に願っています。

認定NPO法人エンパワメントかながわ／浜谷 典子

エンパワメントかながわと横浜総合高校との関わりは、2014年に実施したデートDV予防ワークショップから始まりました。その後、ご縁をいただき、校内の居場所づくりであるようこそカフェにも関わることとなりました。

横浜総合高校は生徒数の多い、いわゆるマンモス校ですが、そこに通う一人ひとりの生徒はそれぞれに魅力を持っています。さまざまな環境や悩みを抱えながら、自分らしさを模索する過程で「ようこそカフェ」と出会うことには、大きな意味があると感じています。

今を生きる高校生の悩みは変化しているのでしょうか。大きくは変わっていないのではないかと思います。進路や成績、友人関係、家族のこと、経済的な不安、アルバイト、就職活動、そして孤独感や劣等感、自己肯定感の低さ、他者との比較——。多様でありながら、どの時代にも共通する悩みがそこにはあります。

ようこそカフェでは、おにぎりやお菓子を囲みながら、生徒たちが自然に言葉をこぼします。その話に丁寧に耳を傾けるスタッフがいることで、本音を語れる安心した空間が生まれています。

悩みを言葉にできる人は、もともと自分の力を持っている人です。一方で、うまく言葉にできない生徒も少なくありません。カフェのメンバーは、そうした小さな変化を見逃さず、受け止める存在でありたいと考えています。それは、毎回生徒一人ひとりを見守るまなざしを大切にしているからこそできることです。



生徒一人ひとりと顔を合わせ、手作りのおにぎりを手渡す



カフェ開始と同時に席が埋まり、生徒の声でカフェがにぎわう

NPO 法人体験活動サポート開港場／小市 聡

ようこそカフェは横浜市立大学の高橋寛人教授(当時)とよこはまユースが天野校長の下を訪ねてスタートしました。そもそも学校は社会に閉鎖的であり、複雑な背景を持つ生徒を多く受け入れている高校であったことも重なり教員間ではカフェに対して否定的、排他的意見が職員会議では複数ありました。その後、小市が校長となり、少しずつ賛同する教員が増え、定着しはじめ、現在の横田校長に引き継がれています。現在は各団体の個性がよこはまユースを中心に調和しています。その中で生徒に必要な体験を学校外で行う体験学習は大きな転換期を迎えています。教員の働き方改革を起点としてどうしても休日に実施せざるを得ない体験活動に教員が引率しにくい環境になりました。予算面においても厳しい状況も続きます。教員の異動によるカフェの主旨の希薄化防止、卒業後に生きる体験活動の継続が他の団体がまねできない特色として今後の発展につながるでしょう。

よこはまユース／尾崎 万里奈 (立ち上げ時担当者)

2015年に企画が立ち上がり、準備期間を経て2016年10月から「ようこそカフェ」がはじまりました。半面に区切った1階のフリースペースに、手書きの看板やテーブルクロスをかけた長机、丸テーブルと椅子をいくつか並べて、ほんとうにちょっとしたお菓子と飲み物、そしてカフェらしくコーヒーを用意して開店した日のことは、いまもくっきりと記憶に残っています。

私たちは、カフェでさまざまな高校生と出会い、お菓子や飲み物を片手におしゃべりしたり、一緒に過ごしたりするなかで、それまで知ることがなかった高校生の悩みや困りごとを“直接”聞くことができるようになりました。

そして、カフェで聞こえてきた声や困りごとに応えようと試行錯誤するなかで、食育や就業体験など新しい活動が生まれ、いまの「ようこそカフェ」が形づくられてきました。

これからもあたらしく出会う横総生の声に向き合いながら、末永く活動が続くことを心から願っています。



天気の良い日は中庭にシートを広げてリラックス

■ ようこそカフェを支えるメンバーが振り返る10年

— スタッフの声 —

ようこそカフェでは、運営団体のメンバーをはじめ、学生からシニア世代までのボランティア、そしてボランティアの調整や学校との連携を担うコーディネーターなどさまざまな立場のスタッフが関わっています。

このページでは、生徒と向き合う中で感じたことや、「ようこそカフェ」があることの意味について、スタッフそれぞれの声をご紹介します。



私がコーディネーターとして参加させて頂く様になって、約2年が経とうとしています。最初は初対面の生徒たちと何をどうやって話そうかとドキドキでしたが、声掛けに対して気さくに色々な話をしてくれる様になりました。それは恋バナから悩み事など様々で、友人関係や進路の事、また家庭や経済的な悩みなど深刻なものもあります。経験を積んだ大人にとっては些細な悩みの様に感じても、一見明るく元気そうに見える生徒にとっては、どれも真剣なんだと気付かされ、聞くだけでも楽になればと、また専門の方に繋げられないか、お手伝い出来る事はないかと思いながら参加させて頂いています。

(Y.W / コーディネーター)

ようこそカフェは、学校の中にある実社会とつながれる貴重な空間です。生徒や教職員の他に、校内で安心できる大人と関われることは、横総生の卒業後の心の支えになるものと感じています。社会に出ていくと異年齢の人、様々な価値の違いをもつ人など、たくさんの人と関わりながら生きることになります。そう生きていく中では、人間関係に関して悩みを抱えることもあるかと思います。そんな時に、自分がどんな生き方をしたいのかを、カフェで出会った大人の姿から導き出せるのではでしょうか。ようこそカフェはそんな存在になっていけるよう、これからも関わらせていただきたいと思います。

(池田 孝 / コーディネーター)

カフェでの活動は3年目になります。活動を始めたころは、生徒さんとたくさん話して力になりたいと意気込んでいましたが、なかなか上手くはいかないもので、ゆっくり、少しずつ信頼関係を築くこと、そして、程よい距離感の大切さを感じています。

横浜総合高校の生徒さんは優しい子が多い印象です。友達のため、家族のために何かするという話をよく聞きます。一緒に話をしていると、私の方が力をもらっていると感じることもあります。

お腹が空いたとき、誰かと話したいとき、ふっと立ち寄ってもらえるよう、「カフェでいつでも待ってるね」と声掛けすることを心がけています。

(白鳥 美香 / コーディネーター)

カフェでの関わりの中で見えてきたことは、役割や評価から離れて、等身大になって話せる場があること
の力強さです。きらきら笑顔で遊びに来てくれた生徒も、関係性を作っていくと、他の人より早く自立しな
ければいけない状況や、進路・友人関係などの不安、自己嫌悪、「本当はこうの方がいいことはわかっ
ているけど…」という葛藤など、揺れ動く心の内を話してくれました。そんなとき、その気持ちを丸ごと受け
止めていくことが、彼らにとっての『安心の土台』となり、前へ進める力になったのではないかと感じてい
ます。同時に、大人の私たちがまだまだ上手に悩めないことも多い中、高校生にとって一緒に悩んでくれる
人がいる場所はやっぱり必要だとも感じました。

(安富祖 樹里／元コーディネーター)

2020年度から2024年度まで、5年間「ようこそカフェ」のコーディネーターでした。横縞の高校生は、み
んなしっかりしているという印象がありました。

第1に、自分の悩みや問題をはっきり言葉にできる人が多い。第2に、僕が大学に入ってから始めた、あ
の複雑な選択科目の組合せを高校生なのに毎年こなしている。そして第3に、早いうちから先のことを考
えて行動する人が多い。僕たちは、みんなの背中をちょっと押せばそれでよかったのです。

ボランティアの割り振りも僕の役目でした。ある学生ボランティアが「字面で読んでいた高校生たちの課題
に日々付き合っている人たちと話す、実感として迫ってきた」と語ったのが記憶に残っています。

(岩倉 智久／元コーディネーター)

「言っていることが、うちのおばあちゃんみたい」。これが私のようこそカフェでおかれている立ち位置のよ
うで。カフェ活動に足掛け10年。生徒さんたちと顔を合わせ、声を掛けていくうちに話をしてくれるよう
になりました。楽しいことや悩んでいることなど、私はただ聞くだけ。それだけですが、生徒さんたちから「水
曜日が楽しみ」「カフェがあってよかった」という声を聞いたたびに、この取り組みの意義を感じます。

10年前と生徒さんたちの雰囲気も変化していきましたが、「1人ではない」「困っていると人に言えること」
の大切さを、生徒さんを通して教えられることばかりです。

(遠山 和恵／キッチンボランティア)

ようこそカフェに参加しはじめの頃のことです。こちらから挨拶をしても目をそらせて通り過
ぎてしまう人や目が合っても無言の人、あるいは話しかけるなという雰囲気の人…そんな生
徒さんのことがとても気になりました。もしかしたら学校に来ていても誰とも言葉を交わすこ
とがないのではないだろうか…その時から、挨拶をする、言葉を掛ける、言葉を交わすこ
とが自分にできることと思って活動に参加してきました。生徒さんと関わりを持ちたいと思っ
て続けてきたことですが、そのわずかな時間のやりとりは、私にとっても楽しい時間です。

(永田 恵／キッチンボランティア)



校内居場所カフェの学生スタッフとして、生徒一人ひとりと接してお話をするに、やりがいと難しさを感じてきました。最近あった嬉しかったことや悲しかったこと、親・友達・恋人とのこと、進路のこと…。一人ひとり悩みは異なり、それへの思いも時間や出来事とともに変化していきます。そのような不安定な状況にいる生徒達に、どのような声掛けや接し方をすればよいかを、他のスタッフの方々とともに考え、一人ひとりの生徒達に接しております。生徒達全員の今と未来の幸せに少しでも貢献することが、学生スタッフとしての目標であり願いです。

(中尾 祐介／学生ボランティア)

ようこそカフェは、生徒にとって憩いの場になっていると思います。カフェが始まると同時に多くの生徒が訪れ、あちらこちらで生徒が楽しく雑談しています。生徒同士の関わりだけではなく、生徒とカフェのスタッフの交流もとても暖かく良い雰囲気です。私も手が空いたときは生徒と楽しくおしゃべりをしています。また、学校生活の中では相談できなかったような悩みごとをカフェで相談できることも一つの魅力だと思います。カフェのスタッフという第三者だからこそ、相談できる内容もあるのだと思います。

(吉川 尊琉／学生ボランティア)

カフェを訪れる生徒さんとは、家族や友達とはまた異なる特別な関係だと感じています。参加もお話も自由で、それぞれの居場所を体現できる場所としてのびのびとした空気をまとっていると思います。生徒の皆さんにとって、自分を見守ってくれている感覚や話ができる繋がりがある、ということを実感してもらえそうな温かな繋がりがあると日々感じています。私自身も毎回生徒の皆さんとお話することを楽しんでいきます。ようこそカフェがお互いにとって楽しさや安心感といった、居心地の良さが感じられる場所であると良いなと感じています。

(山中 美優／学生ボランティア)

ようこそカフェで出会う高校生たちはいつもキラキラとエネルギーに満ちているように見えます。しかし、カフェの回を重ね、顔見知りになると、試験が不安だ、将来が不安だ、推しのライブに落選した…と、さまざまな種類のネガティブを吐露していきます。もちろん常に不安に満ちている生徒が全てではなく、明るく自分の好きなお菓子があると目をキラキラさせながら去っていく生徒や、カフェのある週に起きた嬉しかった出来事を元気に話していく生徒もいます。それを聞いている私も高校生の元気を受け取って元気になって帰っていきます。今後とも高校生のためだけではなく、高校生を知る機会としてようこそカフェが存続していくことを心から願っております。

(A.I／学生ボランティア)



Ⅱ 神奈川県内における「校内居場所づくり」



ストーブを囲んで交流(ようこそカフェ)

Ⅱ章では、神奈川県内の5校で実践されている「校内カフェ」をはじめとした居場所づくりの取り組みについて、はじめた経緯・背景や運営の工夫、生徒の様子などを紹介します。

【学校名・居場所名】

- | | |
|------------------|---------------|
| (1) 神奈川県立大和東高校 | 「BORDER CAFE」 |
| (2) 神奈川県立相模向陽館高校 | 「ひまわりカフェ」 |
| (3) 横浜市立寛政中学校 | 「学びの居場所」 |
| (4) 横浜市立戸塚高校定時制 | 「とまりぎ」 |
| (5) 横浜市立みなと総合高校 | 「みなとCAFE」 |

【質問項目】

1. カフェがはじめた経緯・背景
2. カフェで過ごす生徒たちの様子
3. 運営の中で工夫していること
4. 苦労していること、課題として感じていること
5. 学校と地域がつながり、連携するには

神奈川県立大和東高等学校「BORDER CAFE」

[運営団体] NPO法人パノラマ

○活動日：毎週金曜日の放課後 ○参加人数(1回)：40人～80人 ○開始時期：2017年6月2日

1. カフェがはじめた経緯

《特定非営利活動法人 パノラマ 理事長 石井 正宏氏》

クリエイティブ・スクールとなった年の大和東高校の校長に、校内カフェを実施している元田奈高校の副校長が就任し、カフェ開始の要請が校長からありました。ある種の縁故的なスタートでした。

2. カフェで過ごす生徒たちの様子

ラウンジ・ルームという教室2個分の広いスペースで、タイプの異なる生徒たちが思い思いに過ごしています。緩やかに時間をかけ離合集散しているのを見守り、時に介入する感じです。

3. 運営の中で工夫していること

あまり仕掛けのない自然な場を作り、過剰な飲食の提供なども抑えています。イベント的なことはクリスマス・パーティーくらいで、日常の中に淡々とある感じを目指しています。その中で、いただいた野菜をどう調理しようかなどと生徒と悩みながら過ごすような感じです。恐らく、それにより大人

と生徒たちの関係が、与える、与えられる関係ではなく、とてもフラットな関係になっていると思います。

4. 苦勞していること、課題として感じていること

駅から徒歩20分以上でバスのない立地の高校のため、ボランティア集めに苦戦しています。

5. 学校と地域がつながり、連携するには

教員の働き方改革により、17時以降の振り返りができなくなっています。早く閉めて、振り返りを充実させるより、カフェという居場所を17時まで提供することを選択していますが、生徒情報の共有が課題になっているため、四半期ごとに生徒情報の棚卸しのような時間を設けています。カフェ・マスターの理事長石井が学校運営評議委員のため、学校運営評議会で活動の報告や、学校への要望を伝えられていることがつながりの強化になっています。

地域とは、ボランティア養成講座を地域で開講することや、朝食提供事業などで地元こども食堂との連携などをすることで、一定の関係構築ができていると思います。



神奈川県立相模向陽館高校「ひまわりカフェ」

[運営団体] 認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ

○活動日：月1回 ○参加人数(1回)：約150名 ○開始時期：2016年

1. カフェがはじめた経緯

《認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ
事務局長 高橋清樹氏》

当団体が受託したかながわボランティア活動推進基金21の「定時制におけるキャリア支援事業」協働事業助成金において、神奈川県教育委員会とのキャリア支援の取り組みの一つとして、相模向陽館高校における校内相談居場所カフェを2016年度から実施しました。

相模向陽館高校は午前部・午後部の2部制の昼間定時制高校で、不登校経験や生活困窮などの背景をもつ生徒が多く、中退率も高い学校です。卒業後の社会参加や自立に不安を抱える生徒も少なくないことから、校内カフェを通じて、卒業後につながりうる地域の団体や大人との接点づくりを目的に実施しています。

2. カフェで過ごす生徒たちの様子

生徒は様々な顔を見せてくれるし、変化も見せてくれます。最初は硬い表情で恐る恐るやってくる生徒も、スタッフが笑顔で「いらっしやい。よく来たね」と迎え、「勉強頑張ってるね、行ってらっしやい」と送り出すと、だんだんと軽く会釈したり、はにかみながら「ありがとうございます」とお礼を言ってくれます。お菓子を選ぶ時も、友だち同士でわいわいがやがやする生徒もいれば、ひとりで悩みながら、選んでいく生徒もいます。一瞬ですが、生徒との接点をスタッフは大切にしています。

3. 運営の中で工夫していること

上記のように生徒とスタッフの接点を大事しています。そのため、生徒が「選ぶ」ことができるようお菓子の種類も多くし、その時に会話が生まれるようにしています。

また、カフェの一角に相談ブースを設け、ハローワークや若者サポートステーションなどの就労支援機関の職員が対応できるようにしています。地域の子ども食堂や学習教室、デートDV相談などに関わるスタッフも、所属や看板を表に出さず、自然に会話する中で生徒の様子をキャッチし、必要に応じて高校側と共有しています。

4. 苦労していること、課題として感じていること

生徒が悩みを抱えていても、なかなか表に出さず、内にとめ込んでいる様子がかうかがえます。カフェの役割としてどこまで関与できるか、高校側に理解してもらうことも含めて、相談機能を発揮することが一番の課題であると思います。

カフェを開設してから約10年になり、徐々に成果も現れてきています。現在、「食糧支援」を学校と連携して行っています。カフェの中で直接実施している訳ではないですが、学校のSSWや相談窓口に常時食料を置いて、必要な生徒には、事情をヒアリングし、渡す仕組みが作られています。食糧の提供は、当団体が行っています。また、就職未決定者が卒業前に地域若者サポートステーションにつながり支援を受け、卒業後に就職を果たすといったケースも何件かあります。デートDVのケースも、専門機関の相談につながりました。

5. 学校と地域がつながり、連携するには

まずは高校側の理解、とりわけ教職員の理解が不可欠であると思います。先生方の中には、「お菓子をあげるだけの場所」という表面的な部分だけでカフェの意味を理解し、否定的な考えを持っている方もいます。特に、他校から転勤した方は、生徒の「浮かれた」気分をよしとしない面があります。そのためには、地域とつながる接点の意味を理解してもらい、成果をアピールする必要があると感じています。地域の多くの団体とつながる仕組みづくりも重要な要素ではないかと思っています。



横浜市立寛政中学校「寛政中校内学びの居場所」

[運営団体] 寛政中校内学びの居場所プロジェクト(実施主体法人：一般社団法人 Omoshiro)

○活動日：校内居場所 月2回、学びの講座 年6回、寛政カフェ 年2回、潮田地域ケアプラザでのこども食堂 年1回

○参加人数(各回)：居場所 5～10人、学びの講座 15人、寛政カフェ 約90人、こども食堂 10人(Omoshiroのこどもたち含む)

○開始時期：2024年6月

1. 校内居場所・カフェがはじめた経緯

《寛政中学校教諭 近藤嵩純先生》

①元々、本校では部活動の全入部制を採用していましたが、生徒数の減少に伴い部活動数が縮小し、生徒の希望に沿った活動の実施が困難となったことから、全入部制を廃止するに至りました。その結果、放課後に生徒が継続的に所属できる場が減ってしまっています。

②鶴見区にも「元気塾」や「つるみらい」などの公的な居場所支援の施設もありますが、利用について手続きが必要であり、その性質的にもこどもが必要とするタイミングで自由に利用できるものではありません。

③全国的に話題になりましたが、放課後に所属する場として、「トー横」や「暴走族」という名前が聞かれるようになりました。命の危険にかかわること、犯罪にかかわることに巻き込まれていくケースも珍しくありませんでした。また、一度繋がってしまうと関わりを切ることは非常に困難です。

それらのことから、生徒たちの健全育成のために学校以外の場所にも所属できる場所を作り、信頼のできる大人たちが見守れる環境を作っていきたいと考えました。

2. 校内居場所・カフェで過ごす生徒たちの様子

《寛政中学校教諭 近藤嵩純先生》

校内居場所では定期試験前は自主学習の場所として利用する生徒が集まり、それ以外の時期には落ち着いて過ごせる場所として利用する生徒が集まっています。自主学習の際には、生徒同士でわからないことを教え合ったりスタッフの方に質問したりして学習に取り組んでいます。

居場所として利用する際には、サイコロトークなどをしながらコミュニケーションをとり、自己表現をする方法を学ぶ場として過ごしています。利用する生徒たちからは「話を聞いてもらえることが嬉しい」「肯定してもらえることが嬉しい」などの意見が出ています。

外部の講師の方が来る「学びの講座」では、福祉や心理、法律の専門的な話が自分たちの生活や生き方に繋がって

いることを体験的に感じるができる場となり、生きた学習の場となっています。

寛政カフェでは普段、学校ではできない体験として楽しんでいます。友人同士で話をするだけではなく、地域の方々(斜めの関係性)とふれあい、体験学習を通じてあらたな経験を積んだり、運営のお手伝いをしたりするなど積極的にカフェの取組に関わっていく様子が見られました。

3. 運営の中で工夫していること

《一般社団法人 Omoshiro 勝呂ちひろ氏》

この居場所プロジェクトは現在、3つの柱で運営実施しています。

1つ目の校内居場所では、自習を中心とした学びと他者とのコミュニケーションを軸に居場所を実施しています。自習が1人では難しい生徒とは、漢字しりとり、100マス計算大会など学びへの向き合いを一緒に試行錯誤しながらも学び続けることを大事にしています。他者とのコミュニケーションの場としてはサイコロトークを活用し、お題から生徒と一緒に考え、生徒、スタッフ、先生も交じり、安心して話せる関係づくりを仕掛けています。

2つ目の学びの講座では、対話を生む議論の方法、自身と他者との価値観の違いゲームを通じて触れる機会、メタバース空間の体験など、精神保健福祉士、弁護士など多種多様な外部講師を招き展開しています。講座の中では、正解・不正解ではなく「考える」「想像する」を深める時間を大切にグループワーク中心に実施しています。生徒からは、「今度〇〇な場面で活用したいと思った」「自分ではこうじゃないかと思っていたことが、他は違うことを思っていることが知れたからやっぱり話をしなきゃと思った」などと、実生活とつながる声も上がってきています。

3つ目の校内正門前で開催している寛政カフェでは、生徒同士や生徒と地域の大人が「交流」「つながる」機会として地域関係者、居場所プロジェクトのメンバーも参加し、カフェだけでなくミニゲームでも盛り上がる賑やかな場をつ

くっています。カフェの一環として夏休みには潮田地域ケアプラザで子ども食堂を開催し、生徒と一緒にカレーづくりをしました。盛りつけデザインでの”モテカレーコンテスト”も実施をするなど回を重ねるごとに記憶に残る体験としての場が作り出せるよう、企画から運営までを考えています。

4. 苦勞していること、課題として感じていること

《一般社団法人Omoshiro 勝呂ちひろ氏》

大人の自己実現のための居場所ではなく、生徒を含めそこに集う者同士で作り出す空気や関係性によって感じられる安心感や充足感を価値あるものと大切にできる居場所でありたいと頭の片隅に常にありつつも、同時に子どもと大人の「つながり」や「交流」は、ただ自然発生するのを待つだけでは始まらないと感じています。

「一緒にやろうよ」「それすてきだね」「まさに!なるほど!」などの、声かけの言葉、場の空気、スタッフの雰囲気(あり様)も仕掛けとして設計をし、「関係性の始まり」を意識することできること、継続することが大切な関わりの一つだと思っています。

5. 学校と地域がつながり、連携するには

《寛政中学校教諭 近藤高純先生》

連携を始める際には、課題や困り感を抱えている組織がその内容を共有していくことが重要です。個々の感覚でやりたいことをやみくもに増やすと、内外で反発が生まれ、スムーズに進まなくなってしまう可能性があります。

また、子どもたちへの支援方法をいきなり話し合うのでは

なく、取組の中心となる大人同士がお互いに顔が見える関係性を作ることが必要です。それぞれの立場として話せないことや話さなければいけないことはありますが、「どのような思いをもっているのか」「どんな子どもたちに育てたいか」などの目標をもとに「それぞれができること」を持ち寄っていけるとよいのではないのでしょうか。

また、継続性を考えていく上では、家庭・学校・地域がそれぞれに主たる役割を持ち「忙しい」ということを理解することが必要だと思われま

す。子どもたちのためにしてあげたいことを話しあい、目標を立てることが必要ですが、理想が高くなりすぎて現実的ではないことから始めてしまうと、どこかが負担感を感じてしまい、最悪の場合はその感情が不公平感に転じ、連携をとろうとした際に摩擦が生じることがあると考えられます。

それらのことを回避するためには、組織立てて事業を進めていく必要があります。全員が利用することもたちと関わることに専念するのではなく、取組を客観的にみて内容が目標とずれていないかなどを確認し振り返りをしていく役割も必要です。会議の場ではその振り返りをもとにフラットな立場で意見を共有していけるとよいと思います。

さらに、「形にとらわれすぎない」ことも常に考えておくことも必要です。出来上がった取組や仕組みを守ろうとする形だけが残り、その時のニーズに合っていないものになってしまう可能性があります。

繰り返しになりますが、あくまで子どもたちのニーズが中心にあるべきであり、内容や方法については組織の中で柔軟に検討していけることが理想です。



学びの講座の様子



寛政カフェで地域の大人と交流

横浜市立戸塚高校定時制「定期食事会・とまりぎ」

実施事業	定期食事会	とまりぎ
運営	子ども食堂がじゅまる	横浜市立戸塚高校定時制
協力	横浜メンタルサービスネットワーク・ フードバンク浜っ子南・踊場地域ケアプラザ・ よこはまユース	子ども食堂がじゅまる・ 横浜メンタルサービスネットワーク・ フードバンク浜っ子南・よこはまユース
活動日	月1回(授業開始前に実施)	月1回(授業終了後に実施)
参加人数(1回)	20人(平均)	40人(平均)
開始時期	2023年12月～	2023年12月～

1. 定期食事会・カフェがはじまった経緯・背景

《戸塚高校定時制 教諭 金子宣子先生》

- 経済面の厳しさや家庭の問題により、安定した食事をすることができない生徒がいます。菓子パンや駄菓子、清涼飲料水で食事を済ませてしまったりしている生徒や、1日一食の生活で体調が安定しない生徒もいます。
- 2023年度より、子ども食堂・フードバンク・若者支援団体と連携し、踊場地域ケアプラザで月1回生徒を対象に食事会を行っています。(食事は子ども食堂が調理)
- 家庭にも居場所がない生徒がいるため、食事会を通して若者支援団体と居場所づくりを行っています。

2. 定期食事会・カフェで過ごす生徒たちの様子

《戸塚高校定時制 教諭 金子宣子先生》

定期食事会は、踊場地域ケアプラザで月1回開催しています。12時から調理やパントリーの準備、会場設営を行い、14時から食事を楽しみ、17時からの学校に間に合うよう片づけをしています。参加する生徒は料理や食に興味のある生徒が多く、調理のほか、子ども食堂がじゅまるさんの手伝いや会場設営にも自主的に取り組んでいます。各学年から参加があり、普段関わることの少ない他学年の生徒と交流できる機会となっています。調理に慣れた生徒が他の生徒に教え合い、活動を通してリーダーシップを身につける姿も見られます。

14時からの食事会には、アルバイトと学校の合間に参加する生徒も多く、「みんなで温かいご飯を囲む時間が楽しい」「学校以外の居場所になっている」といった声が聞かれます。食事はカレーやお惣菜、おにぎりなどさまざまで、たこ焼きパーティや季節のイベント、歯科検診なども行っています。こうした交流を通して、生徒たちは地域や学校外の人とのつながりを広げています。

校内カフェ「とまりぎ」は、19時30分から準備と会場設営を行い、授業終わりの20時30分頃から食堂で実施しています。食事はおにぎりや汁物を基本とし、うどんやパスタになることもあり、生徒は楽しみに参加しています。美味しいものを食べて部活に向かう生徒、友達とおしゃべりや勉強をする生徒など、参加の目的はさまざまです。ボードゲームなどで遊べるスペースも設け、1年生と4年生がトランプやけん玉を通して交流するなど、自然な関わりが生まれています。また、夏のアート企画やハロウィンの飾り制作、落語鑑賞や占いなど、地域の方に協力いただいた企画も実施しています。アルバイトやボランティアの紹介、履歴書の書き方支援などの進路相談も行い、学校外のつながりにつながった例もあります。食事後には感謝の言葉が交わされ、片づけを手伝う生徒も多く、生徒・学校・地域が協力してつくりあげている活動です。

3. 運営の中で工夫していること

《戸塚高校定時制 教諭 金子宣子先生》

運営は、校内委員会である「食育ボランティア推進委員会」を中心に行っています。開催日の1～2週間前には、子ども食堂がじゅまるの中村さんと連絡を取り、メニューの確認や外部団体への事前連絡を行っています。

教員には年度初めに、生徒の居場所づくりや食生活改善を目的とした取組であることを全職員に周知し、意見を取り入れながら運営しています。参加生徒はクラスで募り、事前に人数を把握しています。日程は教員の勤務時間外とにならないよう配慮し、行事後など生徒が参加しやすいタイミングに調整しています。終了後には反省会を行い、活動の様子や改善点を共有することで、連携を深めています。

《子ども食堂がじゅまる 中村 葵氏》

生徒たちが楽しく安心して過ごせる居場所となるよう、季節ごとのイベントやワークショップなどを、できる限り取り入れるようにしています。また、食べたいものやリクエストを積極的に聞き取り、生徒たちと一緒に楽しみながら過ごせる空間づくりを大切にしています。あわせて、教員とは異なる立場の大人として関わることを意識し、こちらから声をかけたり、生徒の方から話しに来てくれた際には、踏み込みすぎない、程よい距離感を大切にしています。

4.苦勞していること、課題として感じていること

《戸塚高校定時制 教諭 金子宣子先生》

食事や会場準備、片づけには多くの手間がかかっており、生徒の手伝いがあるものの、量が多いため時間を要することが課題となっています。準備や片づけの効率化に向けて、食事会用の道具をセットで保管したり、手順書を作成したりと、少しずつ工夫を重ねています。

また、継続的な運営も課題の一つです。教員の異動により業務の引継ぎが難しいため、引継ぎ用の資料を整備し、特定の担当者に負担が集中しないよう、職員全体で役割分担していくことを検討しています。

さらに、これまで参加したことのない生徒に参加してもらう方法も課題です。時間の制約により参加が難しい生徒もいる中で、どのようにすれば参加しやすくなるかを模索しています。校内カフェは、先生以外の多くの大人と関わることのできる貴重な機会でもあるため、ぜひ一度は参加してほしいと考えています。

《子ども食堂がじゅまる 中村 葵氏》

大きな「苦勞」と感じることはありませんが、生徒との信頼関係づくりには時間が必要だと感じています。無理に心を開いてもらおうとせず、継続して通える環境を整え、安心

できる距離感を大切にしながら関わっています。

一方で、運営体制や人手には余裕がないと感じる場面もあります。多様な人が関わることで生徒にとってより良い環境になると考えていますが、校内活動という特性上、ボランティア募集の方法には工夫が必要であり、試行錯誤を続けています。また、持続的な運営資金の確保も今後の課題です。将来を見据え、継続的に支援・協力して下さる方とのつながりを広げていきたいと考えています。支援が必要な生徒ほど参加しにくい場合もあるため、保護者や地域にも取組を知ってもらい、活動の広がりにつなげたいと考えています。

5.学校と地域がつながり、連携するには

《戸塚高校定時制 教諭 金子宣子先生》

地域の方々に学校で行っている活動について知っていただくことが大事だと思います。閉鎖的になりがちな学校活動の目的を知っていただき様々な立場からつながりを作り、学校に関わっていただくことで生徒の成長や視野を広がることにつながると思います。

《子ども食堂がじゅまる 中村 葵氏》

地域の大人が学校に関わるきっかけとして、校内カフェに気軽に立ち寄り、自然な形で学校とつながれる場になることが理想だと考えています。福祉・子育て・若者支援など学校外の団体と連携し、多様な人や団体に活動を知ってもらうことが重要であり、外部との協力体制は欠かせません。また、教職員・地域・運営側がそれぞれの役割を理解し合い、学校だけで抱え込まずに連携していくことが大切だと考えています。校内カフェには多くの団体が関わり、先生方も子どもたちのために学校外へ足を運ぶなど積極的に取り組まれており、こどもたちにとって良い学校だと感じています。



定期食事会で地域の方と交流



夜のカフェににぎやかな声があふれる



温かいスープでほっと一息

横浜市立みなと総合高校「みなとCAFE」

[運営団体] 公益財団法人よこはまユース

○活動日：月1回 ○参加人数(1回)：178人(平均) ○開始時期：2022年3月～

1. カフェがはじめた経緯

《よこはまユース 塩嶋 瑤子》

2022年に、当時の校長先生より校内居場所カフェについてご相談をいただいたことをきっかけに本取組はスタートしました。高校生という思春期ならではの悩みを抱える生徒に対し、居場所を提供すること、信頼できる大人に相談できる新しい環境をつくりたい、というお話がありました。

学校では医療機関や相談機関などの外部専門機関と協力体制を築き、様々な支援を行っていますが、学校には通えていても、「悩みを相談できる人がいない」「専門機関に相談しても解決しない」「相談するのは恥ずかしい」といった理由から、SNSなどで生きづらさをつぶやいている生徒もいるようです。このような状況を受け、安心して話せる雰囲気づくりを大切にしながらワークショップやキャリア支援などを通じて一人ひとりがスポットライトを浴びられる場を目指して、みなとCAFEが始まりました。

開始当初の1年間は年4回の実施でしたが、2024年から「東急子ども応援プログラム」に応募し、助成金を獲得したことで毎月の開催が可能になりました。その結果、毎回来てくれる生徒もいれば、「受験が終わって来られるようになった」「受験期間中だけど、塾の合間の息抜きに来た」など、それぞれのペースで参加する生徒もいます。



生徒企画のワークショップ

2. カフェで過ごす生徒たちの様子

《みなと総合高校教諭 湯地 紀美先生》

みなと総合高校は、横浜中華街の入り口・延平門のすぐ近くに位置し、普通科と専門学科それぞれの特長を活かした「単位制総合学科高校」です。個性豊かな生徒たちが多く、色彩豊かな高校生活を楽しむ姿がみられます。その一方で、自分自身の居場所を見つけることに苦勞する生徒も多くいます。今年度から月に1回開催される“みなとCAFE”は、多くの生徒の精神的な居場所 あるいは居場所を見つけるためのきっかけとなっていると感じています。温かく迎えてくださるよこはまユースのスタッフの方々や大学生、様々なワークショップを通じ、学年を超えて、多くの方々とつながる機会を得られます。

みなとCAFEに集まった生徒たちは、大変楽しそうに誰もが笑顔で過ごすことができています。お菓子や飲み物をいただき、カードゲームやワークショップを楽しみ、新しい人間関係を築ききっかけをもらい、そして必要な時には信頼できる大人に相談を聞いてもらうことができる。みなと生にとって素晴らしい環境の中で、幸せな時間をいただいています。

また今年度からは、有志が集まったボランティアの生徒達がみなとCAFEでも活躍してくれています。11月から企画運営を中心となって、楽しみながらみなとCAFEを盛り上げてくれています。ボランティアの中でも生徒一人ひとりの成長する姿を見ることができています。



地域のボードゲーム屋さんと交流

3. 運営の中で工夫していること

《よこはまユース 塩嶋 瑠子》

「ひとりでも参加しやすい」ワークショップづくりをしています。友達と楽しんでもらうことはもちろん、ひとりでも気軽に足を運べて、普段とは違う人と話ができることを大切にしています。また、毎回異なるテーマでワークショップやキャリア支援ができるよう工夫しています。地域の団体や企業、行政など、協力し



てくださる大人の方々がたくさんいることも大変ありがたく感じています。さまざまな方々と出会う機会を通して、生徒の価値観を育てていけたらと考えています。

また、生徒一人ひとりの様子やトーンに合わせながら声をかけることを大切にしています。顔を覚えてもらい、「何かあったらこの人に聞いてみよう」「みなとCAFEに行ってみようかな」と思ってもらえるよう、日頃から挨拶や声かけを心がけています。

4. 苦勞していること、課題として感じていること

《よこはまユース 塩嶋 瑠子》

現在は助成金により運営が成り立っていますが、当該助成金は2025年度で終了予定であり、今後の資金確保が大きな課題となっています。2026年度からは生徒主体での実施を目指し、学校とも協議を重ねながら準備を進めてきました。企業様からの物品提供や食品提供、また学校側の理解や事務長との調整なども進み、来年度も継続して実施できる見通しは立ちつつあります。一方で、安定的な運営には継続的な資金が不可欠であり、この点は引き続き課題と認識しています。

また、2025年度から有志生徒に運営ノウハウを共有していますが、学業等との両立の中で負担が過度にならないか懸念もあります。生徒が無理なく、安心して活動を続けられるよう今後もサポートしたいです。

5. 学校と地域がつながり、連携するには

《みなと総合高校教諭 湯地 紀美先生》

生徒や学校が抱える課題の解決や生徒たちの豊かな成長のためには、学校だけではなく、社会とのつながりの中

での教育の実現が不可欠となっています。今回は、生徒たちが安心できる“居場所”をつくりたいという思いをよこはまユース協力のもと理想的な形で、実現に至りました。この繋がりや基盤を大切に、今後もさらに枝葉を伸ばし、地域の方々と協働した取り組みを継続したいと考えております。

◆ご支援いただいている企業より

《東急子ども応援プログラム事務局 近藤 美穂様》

2024・2025年度「東急子ども応援プログラム※」でのご支援をきっかけに、「校内カフェ」の活動と出会い、何度か訪問させていただきました。カフェが始まると、学生たちはすぐに集まり、ワイワイとお喋りやゲームを楽しんだり、大学生ボランティアとマンツーマンで進路相談をしたり、ワークショップに参加して新たな特技を発見したりと、思い思いに過ごしていました。その姿がとても印象的です。学生を迎える温かな雰囲気や心地よい距離感は、よこはまユースさんの知見とご担当者の思い、そして協力くださる皆さまによって作り上げられ、学生にとって安心できる居場所になっているのだと思います。

当社がご支援するきっかけとなったのは、選考委員長からの「『ユースワーク』そのものの理解がまだ浸透していない日本の状況に、このような取り組みを奨励する意味がある」というコメントでした。2年間のご支援を通じて、その思いを体現していただいただけでなく、活動の意義や成果が評価され、2026年度からは高校生が運営主体となる新しい“校内カフェ”が誕生すること。携わってくださった多くの皆さまのご尽力に、心より感謝と敬意を表します。この取り組みが息長く続き、皆さまの思いがより多くの学生に届くことを願うとともに、みなと総合高校の「校内カフェ」をきっかけに、学生に寄り添う新たな活動が広がっていくことを期待しています。

※東急子ども応援プログラム：東急株式会社が子どもを取り巻く社会課題の解決を目指し、東急線沿線を中心に活動する市民団体を支援する取り組みです。

高校生の「居場所」に関する調査報告

■ 調査の目的

横浜市立高校で校内カフェを実施している3校(横浜市立横浜総合高等学校・横浜市立戸塚高等学校定時制・横浜市立みなと総合高等学校)に通う生徒を対象に、生徒が日常的に「居場所」と感じている場所の有無やその具体的な場所を把握するとともに、校内居場所カフェの利用状況・評価を明らかにすることを目的に調査を実施しました。

■ 調査の概要

対 象：横浜市立高校 校内居場所カフェ実施校 合計1,773人(サンプル目標数：500)

回 答：3校合計 689人(全校生徒数は2024年4月時点)

横浜市立横浜総合高等学校 43%(436人/全校生徒数 1,012人)

横浜市立戸塚高等学校定時制 82%(51人/全校生徒数 62人)

横浜市立みなと総合高等学校 29%(202人/全校生徒数 699人)

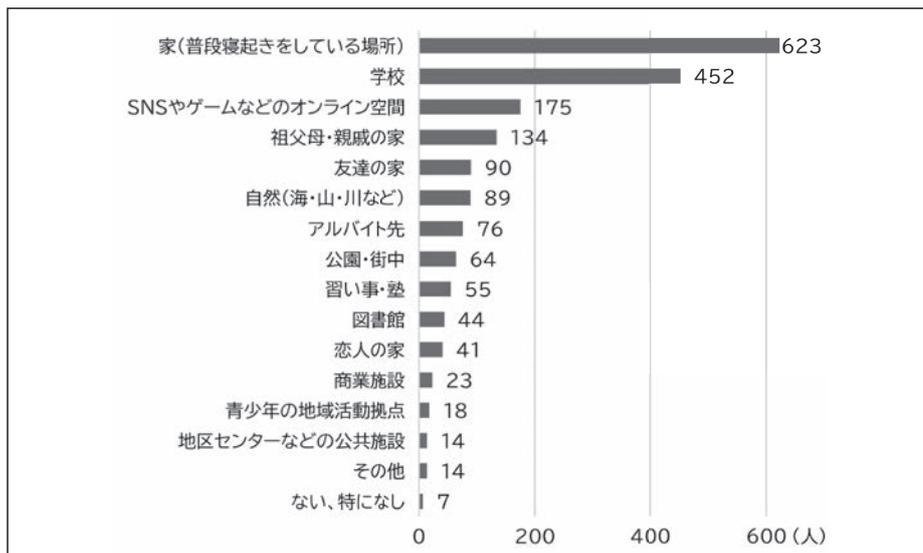
調査期間：2024年11月8日～2024年12月24日

調査方法：オンラインフォームによるアンケート調査。授業中またはカフェ運営時に実施。

■ 調査結果 (抜粋)

(1) 居場所について

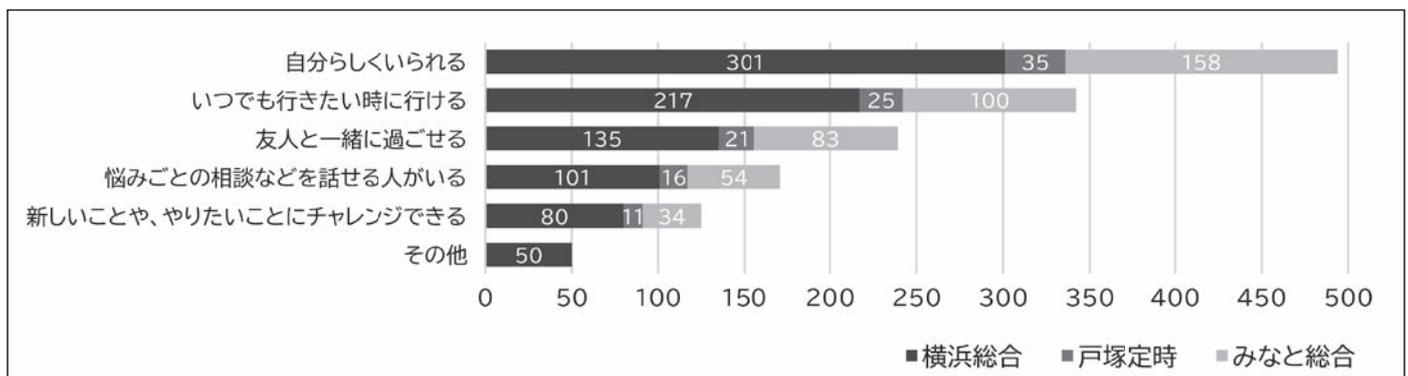
①あなたが居場所だと感じる場所はどんなところですか？(複数選択)



全体の結果では、90%が「家」を選択(623票)。次いで、「学校(教室・校内カフェ・図書室・保健室・部活の合計)」(452票)、「SNSやゲームなどのオンライン空間」(175票)と続いた。

「家」を選択しなかった生徒66人が居場所だと感じる場所は「SNSやゲームなどのオンライン空間」(19.0%)、「学校」(18.0%)、「友達・恋人の家」(11.0%)、「アルバイト先」(10.0%)を選択。

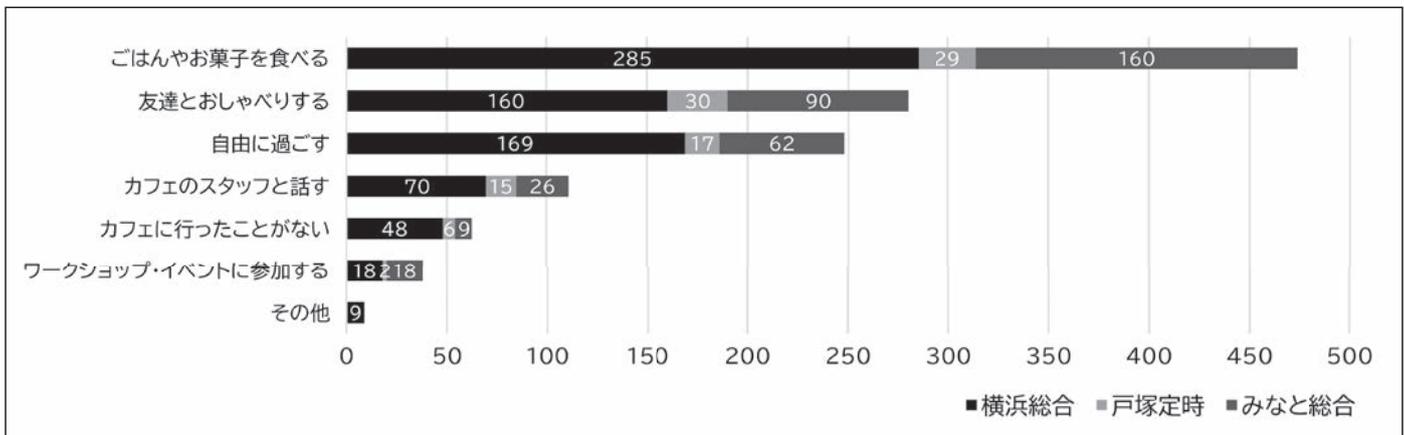
②(①について)なぜそのように思いますか？(複数選択可)



●その他の回答(自由記述) …落ち着ける/作業ができる/一人の空間がある/何もなくてもいい など

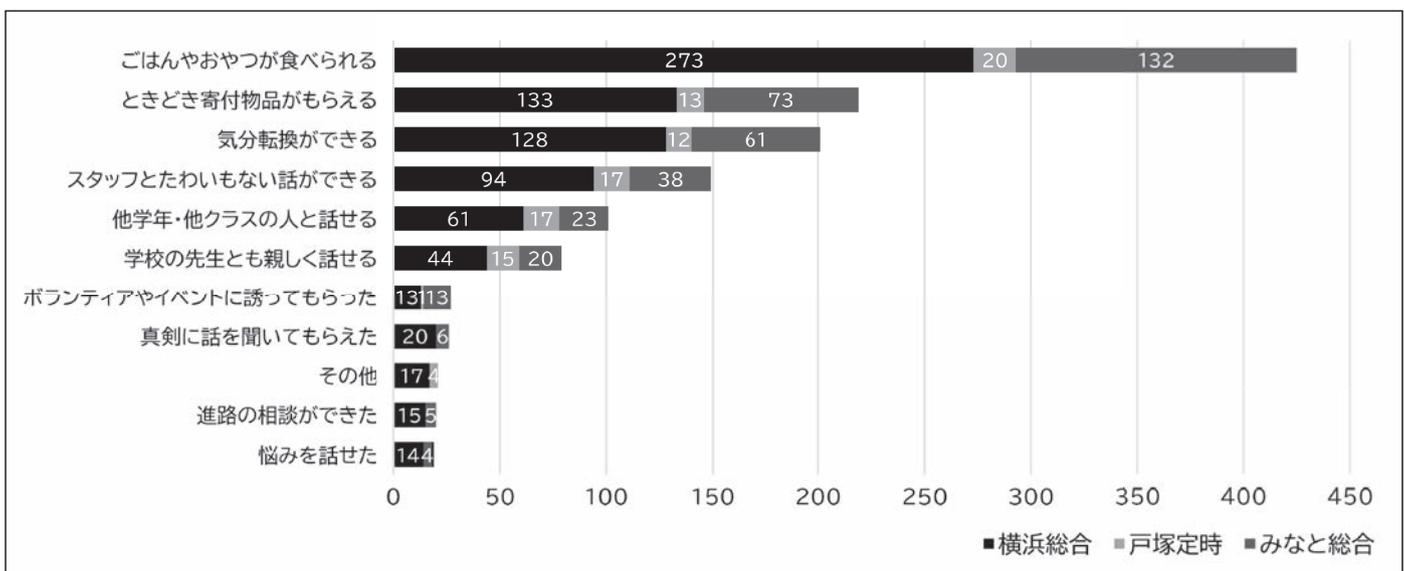
(2) 校内カフェについて

①校内カフェで楽しみにしていることはなんですか？（3つまで選択）



●その他の回答(自由記述) …間食がもらえる／1人でごはんを食べる／カフェメニューのレシピをもらう など

②「校内カフェがあってよかった」と思えるときはどんなときですか？（3つまで選択）



●その他の回答(自由記述) …癒される／外で食べる椅子や机などが設置されている／気持ちの切り替えができる など

■おわりに

今回のアンケート調査対象校は、三部制定時制、夜間定時制、総合学科とそれぞれ異なる特色を持ち、生徒の学校や家庭での過ごし方、放課後の時間帯も多様です。そのような背景の違いがある中でも、「居場所だと感じる場所」については、いずれの高校においても共通した傾向が見られました。具体的には、「自分らしくいられる」「いつでも行きたい時に行ける」「友人と一緒に過ごせる」「悩みごとの相談などを話せる人がいる」といった項目が、多く挙げられています。

また、校内カフェで楽しみにしていることとしては、「ごはんやおやつが食べられること」と回答した生徒が最も多い結果となりました。校内カフェは、学校という安心して過ごせる環境の中で、無料で飲食できることや寄付物品を持ち帰ることができるなど、生徒の生理的欲求を満たす場であると同時に、スタッフや他学年・他クラスの生徒と出会い、つながることのできる場として社会的欲求を満たす役割も果たしていることがわかりました。

本調査については、よこはまユースのホームページに掲載しています。

<https://yokohama-youth.jp/wp-content/uploads/2024-chousa.pdf>

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA EYE'S 2025

2026年3月 発行

■ 編集・発行

公益財団法人よこはまユース



〒231-0011 横浜市中区太田町2-23 横浜メディア・ビジネスセンター5階

TEL:045-662-4170 FAX:045-662-7645

Mail:kikaku@yokohama-youth.jp

URL:https://www.yokohama-youth.jp/
